

【質疑応答要旨】

【記者】 新型コロナワクチンについて、予約キャンセル分と、県営名古屋空港会場の枠で予約が埋まらなかった分も医療職、消防、介護、保育士さんたちに接種を優先して行うということか。

【市】 キャンセル分及び、万一予約枠に余りが出た際には、優先接種の順位に従って接種する。

【記者】 5月末から小牧市内の感染者の状況が非常に深刻になっている。1日20人以上出るときもあり、県下の自治体を見ても感染率が高い。この現状に対する認識と予防策について伺いたい。

【市】 感染経路不明が半分弱で、基本的にはどこで誰が感染しているか分からない状況の中で、小牧として特有の事情があつてということではないと思っている。有効な解決策というのはなかなかないと思うが、感染しない・させないということ、基本的には感染対策を徹底していくということに尽きる。

まずは常時マスクを着用していただくということ。お茶を飲んだり食べ物を口に運ぶときだけマスクを外して、あとはマスクをしていただく。できれば、できるだけ同居の家族以外の方とは食事やお茶を共にしないようにしていただきたい。

その上で、感染症対策の要であるワクチン接種を早期に進めていくことが正常化への第一歩であり、市としては基本的には感染対策を呼びかけるという今までの姿勢をずっと貫いていき、市民の協力をいただきながら、今はとにかく早期にワクチンの接種を進めていく。

【記者】 空港会場の1日2,000人の枠は、どういう算定根拠でこうなったのか。また、市として今後の接種率の目標をどのぐらいに設定しているのか。最後に、市内の個別接種も7,000人程度余っているが、この辺りはどう考えているのか。

【市】 当初県は1万人の枠を提示したが、小牧の状況を考えて8,000人ということにした。当初は8月上旬頃までに接種完了する計画だったが、政府が急に7月末までに完了せよと通達し

てきた。医師会や個別の医院にお願いをして、例えば1週間のうちで平日の通常診療を1日休んでも接種のほうに回っていただけないかとか、そういったぎりぎりのお願いをしながら何とか予約枠を確保してきた。そうした中で、ほかの市町では高齢者の7割が接種するということを想定して接種枠を確保したり、8割と想定して確保したりいろいろあるが、市長としては7月末までに高齢者3万8,000人の100%確保しろということ強く指示した。これは、接種率が読めないためである。新型コロナウイルスを封じ込めていくためには、できる限り接種率を上げていくことが重要。望ましいのは、全員が打っていただくことなので、100%を目標とした。仮に接種率が低ければ、当然64歳以下の方を前倒しできる。

ただ、集団接種会場を含めて、医師がなかなか確保できず、接種回数を上げるのに、そこがネックになっている。そういう中で、空港会場の8,000人というのは非常にありがたく、この8,000人を入れて、3万8,000人の高齢者の7月末までの全員接種をほぼ充足ができるという状況になっている。

現状の予約率は71.9%で、今後上がってくると思うが、このレベルなら市内の個別接種会場、集団接種会場で充足できる数ではある。ただ、接種率がどのくらい上がるか分からないということも含め、医師等の確保が難しい中で、せっかく2,000人の枠があるため、無駄にすることなく接種をしていきたい。

市内の接種会場での予約枠の余りについては、身近なかかりつけ医等接種を受けたいという方が非常に多い中、接種券が届いたときには全て個別接種が埋まっており、空港会場しか空いていないといったことを避けるため、段階的に予約枠を開放していることが原因。全国では、どこでもいいから早く打ちたいと思っても打てないところもある中で、接種券が届いたらいずれかの会場は必ず空いているという状況。特定のかかりつけ医で接種を受けたいという方については、少しお待ちいただかなければならないが、現状最も早く打てるのは空港会場ということ。

【記者】 当日キャンセルが出た場合、どのように取り扱うのか。

【市】 まず、市が直接運営している集団接種会場については、1番目にワクチン接種業務の遂行に不可欠な者。電話予約のオペレーター17人で12回線を回しているが、3月から従事しており非常に熟練してスムーズに予約を受け付けている。この方たちでクラスターが出ると予約に支障が出る。そういうことがないよう、直接接種業務に携わって代替不可能な職員については優先する。あるいは消防職や上水道の水源監視員なども代替することができないので優先順位が高い。それから、高齢者の福祉、あるいは障がい者の福祉サービス。特に自宅訪問でサービスする方なども範囲に入れている。これは小牧独自ではないか。その後、保育士、幼稚園の教諭、市内の小・中学校の教職員などということで順位を定めた。

また、個別接種会場につきましては、第1に基礎疾患を有する方とした。年齢などで重症化リスクの高い方優先としているが、これはあくまで医師の判断による。65歳に満たない方であっても基礎疾患などで重症化リスクの高い方もいる。市では直接把握できないが、それぞれの医師のもとで、「この方はリスクが高いから早く打ったほうがいい」と思われる方がいれば、医師の判断で第一優先にさせていただくよう依頼している。2番目以降は集団接種会場と同じだが、それぞれの医院でキャンセルが生じた場合、医師の判断で優先接種する対象者が見つからなければ、市に連絡をいただき、市が作成した福祉施設などさまざまなリストに沿って順番に連絡して、来ていただける方をそういった医院に案内する。この辺りの業務は大変だと思われるので、人員を2名増員した。一括で予約を管理しているので、こうしたやり方が可能。

先ほどの名古屋接種会場については、キャンセルというよりは、予約枠が埋まらない心配もある。弾力的に運用していくというのは国でも認められているので、とにかく枠を無駄にしない、ワクチンを廃棄しない。それから医師の枠も余力があれば打っていただくように進めていきたい。

【記者】 実際に余剰ワクチンを打った方はいるのか。

【市】 個別の医療機関で、実際にこの運用で接種した方もいる。

【記者】 接種券の発送者数の合計が3万9,000人で、高齢者の予約枠が3万8,000人ということだが、この差は何によるものか。

【市】 計画当初より、転入など人口の流入で増加した。1,000人分ワクチンの予約枠が足りなくなっているので、現在、個別機関のほうにも、なるべく数字を上げていただくように働きかけている。

【記者】 空港会場を活用してもらおうと、市内の医師の負担軽減にもつながるのか。

【市】 当然ながら名古屋空港会場を有効活用すれば、その分市内の負担というのは減る。ただ、小牧はまだどこで打つか選択できる状況にあって、市民の皆さんが市内を選択されるということについては止められない。PRには努めていくが、最終的には市民の判断で打てるところで打っていただくということ。

【記者】 市民から、図書館で来館者の体温を測ったりしておらず、大丈夫なのかと心配の声をいただいている。これについて何か考えはあるか。

【市】 基本的には来館される方自身での体温測定をお願いしており、入り口のところに自動で体温が測れる機器も設置している。来館者が集中するような状況があれば、非接触型の体温計も装備しているので、そちらでの対応も考えていきたい。ただ、現時点では読書の座席等についても制限を加えているので、特に大きな問題は起こっていないと把握している。